The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	他者からの受容感と生き方態度に関する研究 : 存在受容感尺度による検討
Author(s)	高井, 範子
Citation	大阪大学教育学年報. 2001, 6, p. 245-254
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10909
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学教育学年報 第6号（2001年）
Annals of Educational Studies Vol.6

他者からの受容感と生き方態度に関する研究

－存在受容感尺度による検討－

高 井 範 子

【要旨】

本研究では存在受容感尺度の再検討を行い、大学生および成人男女合計1695名(M687名、F1008名：大学生から70代以上の計７つの年齢群)を対象に、存在受容感尺度が測定する領域の発達的変化の検討および生き方態度との関連の検討を行った。存在受容感尺度からは４因子「他者からの受容感」「孤独感・疎外感」「超越力を意識」「感謝・安らぎ感」が抽出されたが、前２下位尺度は性の主効果のみが見られ、「他者からの受容感」は女性が、「孤独感・疎外感」は男性がそれぞれ有意に得点が高く、性差が明確なものとなっていた。「超越力を意識」領域および「感謝・安らぎ感」は加齢に伴って得点が上昇する傾向にあり、前者では女性の20代から30代にかけて0.1％水準での有意な得点上昇が特徴的であった。また、両者共に女性の方が男性よりも得点が高い傾向にあり、前者では30代、40代、60代において性差が見られ、後者でも女性の方が男性よりも有意に得点が高く、性差が明確なものとなっていた。さらに、「他者からの受容感」や「感謝・安らぎ感」は自己の存在価値意識や自己受容と正の関連をもち、人生に対する積極的な生き方態度や他者受容にも影響を及ぼすものであることが示された。

1．はじめに

人が生きていく上において「受容」というテーマは重要なものであろうと思われる。従来、心理学領域では「受容」と言えば「自己受容」が主として取り上げられ、自己受容ほどではないが、それとの関連で「他者受容」が取り上げられてきた。成人期において自己受容度は加齢と共に増加する傾向にあり（高井,2000a)、ありのままの自己を受容できていることは、人生を主体的自律的に生きることや、日々の生活において自己課題的、意味志向的に生き、自己の存在価値意識を高めることに強く関連し、他者を受容できることにも通じるものであることが示されている（高井,2000b)。さらに、他者を受容しようとする姿勢は男女共に成人中期以降、加齢と共に強まり、大学生以上の全年齢群を通じて女性の方が男性よりも得点が高く、30代以降すべての年代において性差が見られている（高井,1999b)。また、自己受容と他者受容との間に高い相関関係があることも見出されている（Sheerer,1949, Spivack,1956)。上田・河野(1993)は両者の関係をさらに異文化間コミュニケーションにまで広げて大きく捉え、異文化社会への適応に際して異質性を受け入れるためには、先ず自己が充実し、成長していることが必要になるとし、異質性との接触が人格の成長や自己洞察を深める契機となるとしている。異質性との対決の後に、ありのままの自己を受容することが、異質性を弁証法的、超越的に統合し、自己を新しくより高次な次元へと導くことになるとしているのである。

自己受容、他者受容に比して、「他者からの受容」に関する実証的研究は少ないように思われるが、これら３者間の関係をみたものとしては、自己受容の高い者は他者受容も高く、同時に他者からも受容されていると感じる傾向が強いことが示されている（Fey,1955)。また、自己評価の高い人は自己を受容されたと感じやすいことや、受容されたと感じる人は相手に対して魅力を感じやすいことなども示されている(梶田,1966)。さらに、他者から受け入れられているという受容感は自尊感情を促進するものであるという報告もある（Leary,Tambor,Terdal & Downs,1995)。Rogers(1958)はその心理療法において、治療者が信頼関係やあたたかさの雰囲気の下、クライエントを受容することによって自己受容へと導き、クライエントが生きる世界においてその経験に対して開かれ、生き生きとした生の営みを可能ならしめようとした。このように、人が自己を受容できるためには、その前提として、親(養育者)、家族、或いはその他の他者によって受容されるという経験が重要なものであろうと思われる。人がこの世に生を受け、母親から無条件

に与えられる愛情や世話といった良好な母子関係によって基本的信頼（Erikson,1959）が培われるという。他者からの受容感によって自己の存在に対する自信が持てるようにもなり、生きることへの積極的関与にもつながるものであろうと思われる。しかしながら、他者からの受容に関する研究は自己受容ほどには余りなされていない。

そこで、本研究においては「他者からの受容感」に焦点を当てることにした。同時に、他者からの受容という場合、人間存在だけでなく、人知を超越したものによって受容されている感覚も含めることにした。日本には“お陰様で”という言葉がある。大辞林（三省堂）によれば、「お蔭は、神仏や他人から受けた恩恵や助け」を言い、「お陰様は、相手または世間一般に対する漠然とした感謝の気持ちを表す」とある。現在の自己が存在することの背景にある多くの人々による恩恵や助けという意味のみでなく、大自然や宇宙、神仏など、人間を超越したものに対しての意味合いも含まれている言葉である。そこで、本研究は老年期までも含めた生き方態度研究の一環としてなされているものでもあるため宗教的次元を考慮するものとして「人知を超えたものとしての超越力」を視座に含めることにする。さらに、上記と関連して「感謝の気持ち」の発達的変化も合わせて検討することにする。また、他者からの受容感とは相反した感情の一つとして「孤独感」が挙げられよう。孤独感や疎外感はともすれば人を絶望の淵にまで追いやり、“生”から離脱させる要因にもなるものである。生き方態度を検討していくためには欠くことのできない視点の一つであろう。孤独感を他者との親密な関係が築けず、他者から切り離されていると感じていることと捉える見解や、或いは極めて苦渋に満ちた感情として捉え、乳幼児期の愛情欠如の問題を含め、精神医学者や哲学者の見解を通して孤独感を検討したものもある(Fromm-Reichman,1959；Sermat,1978)。落合（1989）は、青年期の孤独感は「人との理解・共感の可能性についての考え方」と「自己の個別性の自覚」の２要因からなる２次元構造をなすとし、青年期の孤独感を「仲間外れ型孤独感」「理解欠如型孤独感」「人間不信型孤独感」「代替不可能型孤独感」の４類型に分類している。また、工藤・西川（1983）によると、孤独感の強い人は、父母との関係を不愉快で疎遠で冷たいものと考えており、両親に不信感を抱き、自分を突き放された存在として捉える傾向があるという。特に、母親との関係が重大な意味を持ち、その関係の喪失や崩壊が強い孤独感を生み出すことが示されている。本研究においては、“ありのままの自己が他者から受容されている感覚、および人知を超越した力によってもトータルに受容されている感覚”を含め、「他者からの受容感」「超越力」「感謝」「孤独感」といった領域を尺度の再検討も含めて、成人期を対象として発達的視点から検討することにした。さらに、これらと、自己受容や他者受容、および生き方態度や対人関係、自尊感情との関連をも検討することにする。

2．方 法

（1）調査対象者および調査実施の手続き

本研究における調査対象者は、大学生、会社員、公務員、自営業、専門職その他に従事する有職者および主婦などである。60代以上の男性には無職(98名)も含まれる。質問紙配布は国公私立の大学、および複数の企業（大手・中小企業）、市役所その他に行い、さらに、知人を通して所属サークルその他への配布を依頼した。各組織内での配布回収は組織に属する知人に依頼した。また、本研究において重視する視点は、主として人生を前向きに積極的に生きる人々の生き方態度であるため、老年期に関しては高齢者大学に質問紙の配布、回収を依頼し協力を得た(高齢者大学有効回答176部)。有効回答総計は1695名（M 687名, F1008名）である。内訳は、大学生285名（M 118, F 167）平均年齢20.9歳、大学生を除く20代 345名（M 128, F 217）25.5歳、30代271名（M 130, F 141）34.0歳、40代318名（M 112, F 206）44.9歳 、50代 183名（M 56, F 127）53.9歳、60代202名（M 93, F 109）64.3歳、70代以上91名（M 50, F 41）73.7歳である。調査時期：1996年10月～11月。

（2）調査尺度

①存在受容感尺度[1)]：ソーシャルサポートに関する研究（和田,1989）や自己の二面性に関する研究（山本,1989)、および青年期の疎外感を扱った宮下・小林（1981)、その他、心理学や宗教学など文献を参考

にして項目収集を行った。独自に追加したものも含めて計30項目、５件法による尺度を作成し、最終的に19項目を抽出。得点化は「よく当てはまる（5点）」～「全く当てはまらない（１点）」である。②自己受容尺度（宮沢,1988):本研究においてはＬスケールを除く27項目の合成得点を用いた。“自己理解”、“自己承認”、“自己価値”、“自己信頼”の４側面を含む４件法尺度である。③自尊感情尺度（Rosenberg,1965）：10項目。山本・松井・山成（1982）が邦訳したものを５件法で用いた。④実存的生き方態度インベントリー（EAL）：“主体性的側面[決断性・責任性・独自性]”、“自己の存在価値”、“自己課題性”、“意味志向性”から構成される35項目、５件法尺度（高井,1999a)。⑤ＰＩＬの態度スケール:Crumbaugh & Maholick(1964)の尺度の岡堂(1993)による改訂版を用いた。20 項目、７件法尺度。主にどの程度人生に生きる意味や目的を見出し, 活気や充実感に満ちて生活しているかといったことを問うものである。⑥対人関係性尺度：“閉鎖性・防衛性”、“ありのままの自己”、“他者依拠”、“他者受容”、“自己優先”よりなる28項目、5件法尺度(高井,1999b)。

3．結　果

（1）存在受容感尺度

存在受容感尺度の因子構造を調べることを目的として、まず存在受容感尺度の30項目に対して探索的因子分析を行った。最尤法による因子分析（Promax回転）を行い、項目内容および因子負荷量を検討した結果、11項目を削除して得られた計19項目に関して、再度、最尤法（Promax回転）を行い４因子を抽出した（Table１）。第1因子は“家族や他人を問わずありのままの自分を受け入れてくれる人がいる。信頼し合える人や理解してくれる人がいる”といった項目に高い負荷量が見られたので「他者からの受容感」因子、第２因子は“孤独で寂しいと感じている。拒否されることが多いと感じている”といった項目に高い負荷量が見られたので「孤独感・疎外感」因子、第３因子は“何か大きな力（神様、仏様、大自然など）によって生かされている、守られている、ありのままの自分が受け入れられていると感じている”といった項目に負荷量が高かったので「超越力を意識」因子、第４因子は“いろいろな人のおかげで今日までやってこれたのだと感謝している。今までの人生において人にあたたかく包まれている安らぎや喜びを感じたことがある”といった項目に負荷量が高かったので「感謝・安らぎ感」因子と命名した。

次に、検証的因子分析を行うことにする。検証的因子分析モデルでは、因子負荷行列においてある特定の因子負荷量をゼロと固定することによ

Table１　存在受容感尺度の因子パターン行列（Promax回転後）

項目内容	F_1	F_2	F_3	F_4
5. 私には家族や他人を問わず、ありのままの自分を受け入れてくれる人がいる。	.921	.055	.009	-.056
4. 私には心から信頼し合える人がいる。	.869	.019	.014	-.033
6. 私には私をあたたかく見守ってくれる人がいる。	.836	.012	-.019	.033
1. 私には私を理解してくれる人がいる。	.772	.007	.028	.000
8. 私には私がつらいときや悲しいときに慰めてくれる人がいる。	.676	-.027	-.027	.137
13. 私には私の個人的問題について話し合える人がいる。	.646	-.084	-.020	.039
11. 私は無視されることが多いと感じている。	.057	.871	.019	.084
28. 私は人から拒否されることが多いと感じている。	.163	.784	-.009	-.073
24. 私は孤独でさびしいと感じている。	-.062	.587	-.023	.009
14. 私は誰からも愛されたことがないと感じている。	-.068	.555	.059	-.125
7. 私の周囲には心を許し合える人がほとんどいない。	-.321	.552	-.092	.114
23. 私には私の話を真剣に聞いてくれる人がいない。	-.208	.541	.020	-.011
21. 私は何か大きな力(神様、仏様、大自然など)によって生かされているのだと思う。	-.044	-.009	.947	-.008
30. 私は何か大きな力(神様、仏様、大自然など)によって守られていると感じている。	-.009	.012	.897	.073
9. 私は何か大きな力(神様、仏様、大自然など)によって、ありのままの自分が全面的に受け入れられていると感じている。	.063	-.006	.837	-.023
26. 私は日常生活のささやかなことにでも感謝の思いがある。	-.041	.084	.149	.711
19. 私はいろいろな人のおかげで今日までやってこれたのだと感謝している。	.013	-.026	-.003	.692
27. 今までの人生において、人にあたたかく包まれている安らぎや喜びを感じたことがある。	.157	-.030	-.058	.646
22. 周囲の人たちはあたたかい心で私に接してくれているように感じている。	.076	-.197	.019	.514

因子相関行列	F_1	F_2	F_3
F_2	-.676		
F_3	.251	-.140	
F_4	.658	-.592	.502

って、解釈のし易い単純構造をもつモデルを構成し、適合度を吟味することで、その単純構造を統計的に検証しようとする。また、平均の異なる属性を変数に含めてモデルの適合度を検討することによって、平均の異なる集団を合併して行った分析モデル[2)]の妥当性を検討することが可能となる。本研究では、年齢と性別によって尺度の平均が異なることが想定されている。そこで、因子の単純構造を検討し、年齢と性による平均の違いを調整するために構造方程式モデリングを用いて検証的因子分析を行い、探索的因子分析モデルの妥当性の検討を行った（Fig. 1）。パス係数は標準化されたパラメータの推定値を用いた。構造方程式モデリングは様々な適合度指標を用いてモデルの適切さを検討するものであるが、本尺度のモデルの適合度は、GFI=.94, AGFI=.92, CFI=.95, RMSEA=.06であり、いずれもほぼ満足できる値が得られている（狩野,1997)。これらの結果から、平均の違いを調整した上でもなお、探索的因子分析と同様の因子パターンをもつモデルが受容されている。従って、存在受容感尺度の各観測変数（項目）はそれぞれの因子の指標となり得、探索的因子分析によって得られたモデルは妥当であると言えよう。

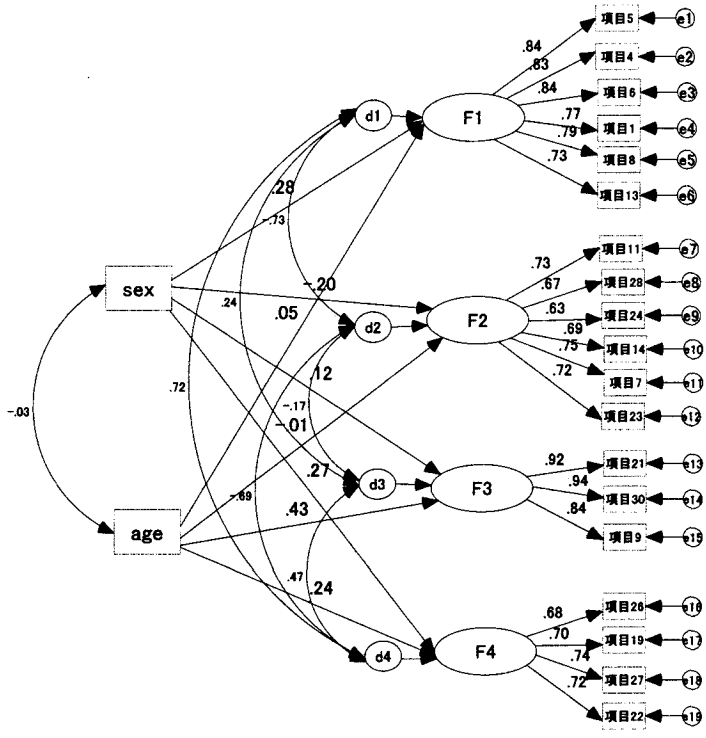

Fig. 1　存在受容感尺度のMIMICモデル

年齢と性からのパス係数は４つの因子における平均を表す。すなわち、第１因子「他者からの受容感」と第２因子「孤独感・疎外感」は年齢による効果は見られず、性のみ効果（第１因子: .28,　第2因子:－.20)が見られた（男性を基準０とし、女性を１としている)。「他者からの受容感」は女性の方が男性よりも平均が有意に高く、逆に「孤独感・疎外感」は男性の方が女性よりも有意に平均が高い。また、第３因子「超越力を意識」第４因子「感謝・安らぎ感」においては年齢、性ともに効果が見られ(第３因子: .43, .12、第４因子: .24, .27)、加齢に伴って平均が上昇する傾向にあると同時に、いずれも女性の方が男性よりも平均が高い傾向にある。

尺度の信頼性をCronbachのα係数によって求めたところ、第１（下位）尺度.92、第２尺度.85、第３尺度.93、第４尺度.80であった。いずれも高い数値を得ており、各下位尺度は一貫した内容をもつと言えよう。

（2）発達的変化の検討

大学生から70代以上の計７つの年齢群による年齢段階別の差、および性差を検討した結果をTable 2に示した。存在受容感尺度の得点に関して、年齢と性を２要因とする分散分析を行った結果、第３（下位）尺度のみ交互作用が有意であった（$F_{(6,1681)}=2.91, p<.01$）。第１尺度と第２尺度は交互作用が有意でなく、いずれも性のみ主効果が0.1％水準で有意であった（第１尺度：$F_{(1,1681)}=126.61$,第２尺度：$F_{(1,1681)}=55.21$）。第４尺度は年齢による主効果（$F_{(6,1681)}=17.53$）と性による主効果（$F_{(1,1681)}=102.31$）がそれぞれ0.1％水準で有意であった。

Table 2　年齢段階別における存在受容感尺度得点の平均値（SD）

		大学生	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代	70代以上
第1下位尺度	男　性	24.25(5.06)	23.48(6.29)	23.88(5.16)	23.89(4.75)	24.46(4.82)	23.97(4.17)	23.70(4.82)
他者からの	女　性	26.09(4.58)	26.47(4.20)	26.26(4.12)	26.45(3.89)	26.89(3.49)	26.72(4.03)	28.20(3.06)
受容感	性　差	*	***	**	***		**	***
第2下位尺度	男　性	12.23(4.83)	11.23(4.74)	11.70(4.40)	11.63(4.38)	11.05(4.00)	11.98(4.24)	12.88(4.92)
孤独感	女　性	10.69(4.17)	10.40(4.17)	10.18(4.12)	9.86(3.75)	9.84(3.73)	9.93(4.16)	9.76(4.36)
疎外感	性　差	*		*	**		*	**
第3下位尺度	男　性	7.48(4.32)	7.70(3.84)	8.57(4.18)	8.96(3.99)	10.21(3.89)	10.94(3.12)	11.22(3.00)
超越力を	女　性	7.28(3.64)	7.92(3.70) <<<	9.76(3.91)	10.67(3.64)	11.43(3.71) <	12.70(2.98)	13.22(2.30)
意識	性　差			*	**		*	
第4下位尺度	男　性	15.58(3.08)	15.43(3.27)	15.72(2.72)	15.77(3.01)	16.59(2.85)	17.08(2.21)	17.22(2.40)
感謝・	女　性	16.91(2.68)	16.70(2.58)	16.92(2.85)	17.37(2.44)	17.89(2.07)	18.55(1.93)	19.20(1.20)
安らぎ感	性　差	**	**	*	***		**	*
	男女込み	16.36(2.92)	16.23(2.92)	16.35(2.85)	16.81(2.76) <	17.49(2.41)	17.87(2.18)	18.11(2.18)

*** (<<<) p<.001, ** P<.01, * (<) p<.05

次に、交互作用が見られず、性の主効果が有意であった第１尺度、第２尺度、第４尺度についてそれぞれ男女別に平均を求めると、第１尺度「他者からの受容感」については女性の平均（26.53）が男性の平均（23.91）よりも有意に高く、第２尺度の「孤独感・疎外感」では、逆に男性の平均（11.76）が女性の平均（10.16）よりも有意に高かった。さらに第４尺度の「感謝・安らぎ感」では女性の平均（17.36）が男性の平均（16.01）よりも有意に高い結果であった。第４尺度の年齢の主効果について男女込みにして多重比較（Tukey）を行った結果、40代から50代にかけては５％水準での有意差が見られた。交互作用が有意であった第３尺度「超越力を意識」について各水準ごとに単純主効果の検定を行った。年齢および性に関して男女ともに0.1％水準で有意であったため多重比較（Tukey）を行った。男女共に加齢に伴って得点が上昇する傾向が見られたが、女性においては20代から30代にかけて0.1％水準で、50代から60代にかけて５％水準での有意差が見られた。また、性差に関しては30代で５％水準、40代で１％水準、60代で５％水準で女性の方が男性よりも有意に得点が高かった。

以上の結果を概観すると、「他者からの受容感」は女性の方が男性よりも有意に強く感じており、「感謝・安らぎ感」は男女共に加齢に伴ってこれらの意識が強まると同時に、女性の方が男性よりもこれらの意識を有意に強く抱いている様子が窺える。また、神仏や大自然など「人知を超越した力を意識」する気持ちは男女共に加齢と共に強まるのであるが、20代以降、女性の得点の方が男性よりも高く、30代40代および60代において性差が見られた。逆に、「孤独感・疎外感」は男性の方が女性よりも有意に強く感じている様子が窺えた。

（3）他の尺度による検討

存在受容感尺度が測定する領域は自己受容を初めとして、生き方態度領域（EAL・PIL）、自尊感情および対人関係領域とも密接な関連を持つものと考えられる。そこで、それらの領域を測定する尺度と存在受容感尺度との関連を検討した。全年齢群を込みにした尺度間相関（Pearsonの相関係数）の結果はTable 3

の通りである。さらに、4下位尺度のうち「他者からの受容感」を取り上げ、この領域が各年齢段階別・男女別（本稿では4期に分けて分析を行った）において他の尺度が測定する領域とどのような関連を持っているのかを検討した（Table 4 。但し、相関係数の絶対値が.300以上のものがある下位尺度のみを示した。この分析結果は考察に含めて行うことにする）。

Table 3　尺度間相関

	決断性・責任性・独自性	自己の存在価値	自己課題性	意味志向性	PIL	自己受容	自尊感情	閉鎖性防衛性	ありのままの自己	他者依拠	他者受容	自己優先
他者からの受容感	.228***	.523***	.339***	.360***	.413***	.430***	.363***	−.328***	.191***	−.082***	.348***	−.165***
孤独感・疎外感	−.213***	−.481***	−.290***	−.267***	−.472***	−.569***	−.495***	.530***	−.158***	.217***	−.262***	.258***
超越力を意識	.251***	.354***	.374***	.448***	.334***	.214***	.123***	−.088***	.207***	−.085***	.314***	−.110***
感謝・安らぎ感	.285***	.533***	.462***	.539***	.520***	.462***	.360***	−.340***	.250***	−.094***	.505***	−.236***

*** p<.001

Table 4　年齢段階別における「他者からの受容感」と他の尺度間相関

		実存的生き方態度インベントリー(EAL)							対人関係性	
		決断性・責任性・独自性	自己の存在価値	自己課題性	意味志向性	PIL	自己受容	自尊感情	閉鎖性防衛性	他者受容
大学生	男性	.272**	.621***	.489***	.418***	.413***	.423***	.485***	−.261**	.349***
	女性	.167*	.528***	.354***	.206**	.459***	.461***	.416***	−.435***	.282***
20代・30代	男性	.359***	.653***	.462***	.425***	.565***	.569***	.484***	−.415***	.322***
	女性	.221***	.464***	.339***	.334***	.424***	.452***	.335***	−.372***	.366***
40代・50代	男性	.283***	.564***	.376***	.412***	.450***	.409***	.405***	−.369***	.487***
	女性	.205***	.440***	.278***	.294***	.354***	.429***	.320***	−.281***	.232***
60代・70代以上	男性	.312***	.538***	.404***	.448***	.472***	.501***	.466***	−.229**	.356***
	女性	.297***	.410***	.249**	.386***	.280**	.309***	.168*	−.226**	.369***

*** p<.001 ** p<.01 * p<.05

先ず、実存的生き方態度領域（EAL）では存在受容感の各下位尺度と最も関連が見られたのは“自己の存在価値”であった。「他者からの受容感」や「感謝・安らぎ感」「超越力を意識」との間に正の相関が、「孤独感」との間に負の相関が見られた。また、「感謝・安らぎ感」は“意味志向性”との関連が強く、“自己課題性”とも正の相関がある。「超越力を意識」は“意味志向性”と正の相関が見られた。さらに、EALと関連のある“PIL”について見てみると、存在受容感尺度の下位尺度の中では「感謝・安らぎ感」が最も強い正の相関があり、次いで「孤独感」が負の、「他者からの受容感」および「超越力を意識」との間に正の相関が見られた。

次に、“自己受容”に関しては、「他者からの受容感」との間に正の相関が見られるが、それ以上の強さで「孤独感」との間に負の関連が見られている。同時に、「感謝・安らぎ感」とも正の相関が示されている。また、自己受容と強い正の相関関係にあることが示されている“自尊感情”（高井,1999b）に関しても、「孤独感」が負の相関を示し、「他者からの受容感」および「感謝・安らぎ感」が正の相関を示していた。対人関係性領域においては、“閉鎖性・防衛性”が「孤独感」と最も強い正の相関を示し、「感謝・安らぎ感」「他者からの受容」は負の相関を示していた。“他者受容”と最も関連がみられたのは「感謝・安らぎ感」であった。次いで「他者からの受容感」および「超越力を意識」との間に正の相関がみられた。

4. 考 察

人間存在だけでなく、人知を超えたものによる受容感までも含めた、自己を受容されているという感覚について成人期を対象に発達的視点から検討した結果、日々の生活において、ありのままの自分が受け入れられ、理解されているといった「他者からの受容感」や、過去において他者からあたたかく受容され、安らぎや喜びを感じた経験、およびいろいろな人のおかげで今日までやってこれたことへの感謝や日常生活のささやかなことに対する感謝の気持ちを示す「感謝・安らぎ感」、および人知を超越したものによって生かされ、守られ、ありのままの自分が受け入れられているといった受容感を含む「超越力を意識」する感覚は女性の方が男性よりも有意に強く感じていることが示された。逆に孤独で寂しいと感じたり、無視されることが多いと感じる「孤独感・疎外感」は男性の方が女性よりも有意に強く感じている様子が窺える結果であった。

青年期とプレ成人期（13歳から20代後半）において心理的孤独感を感じている者が多いことや（落合,1989)、大学生男子の方が女子よりも孤独感を有意に強く持っていることが報告されている(諸井,1987)。さらに、老人ホームに在園する高齢者の場合、女性の方が男性よりも「孤立認知も孤独感もない」とした割合が多かったことが示されている（長田・原・荻原・井上,1981)。

大学生から70代以上の年齢群を対象とした本研究結果は、これら一連の孤独感に関する研究結果とも符合するものであるが、これらの結果の背景にある要因の一つとしてソーシャルサポートの視点が挙げられよう。孤独感が友人サポートに大きく規定され、多くのサポートが得られれば得られるほど孤独感を緩和する方向に作用するという報告がなされている（和田,1992)。女性の方が男性に比して「他者からの受容感」を強く感じているという本研究結果は、女性の方が男性よりも人的サポート・人とのつながりのネットをより多く持っているか、或いは人数の多少の問題ではなく、また単なる他者と物理的空間を共有するだけのつながりというのでもなく、自分がつらい時など人生の重要な局面において精神的な支えとなる他者の存在があることを示唆するものと言えよう。また、大学生男子は女子よりも互いの内面に影響するような深い関わりを回避するだけでなく、表面的な対人関係の維持からも脱却する傾向が強いことが示されているが（岡田,1993)、男女の対人関係のあり方の相違もまた要因の一つと考えられよう。長田ら(1981)は、女性の方が孤独に対する耐性が高いのではないかとしており、孤立認知や孤独の低減には、自分にとって意味のある他者との交流が重要なのではないかと指摘している。本研究結果においても見出された明確な性差が生じる背景要因については今後さらに探っていかねばならない課題であろう。

他の尺度との関連を検討した結果からは、「他者からの受容感」や「感謝・安らぎ感」をもつことができている人は自己の存在価値意識を自覚できている傾向にあった。さらに自己を受容でき、自尊感情をも合わせもち、日々の生活において苦しみから逃避せず、他者に役立つことやどんな状況にも意味を見出そうとする意味志向性を持ちながら、自分のするべき課題に邁進するといった、人生に対する積極的で前向きな生き方態度をもっている様子が窺えた。このような人は人生における自分なりの意味や目標を見出し、日々活気や充実感に満ちて生活できている度合いの高い人でもあった。さらに、他者に対しても閉鎖的・防衛的な態度ではなく、他者を理解し受容しようとする姿勢をも持っていることが示されていた。他者受容に関しては、他者からの受容感以上に「感謝・安らぎ感」が強い関連をもっていた。また、「超越力を意識」する姿勢と最も強い関連がみられたのは意味志向性であった。いかなる運命や境遇の中にも、また苦しみや悩みの中にも意味を見出していこうとする姿勢が、人知を超えたものに対する思いと関連しているのである。同時に、自己の存在価値や人生における自分なりの意味や目標を見出し、日々の生活を自己課題的に生き、充実感に満ちて生活する中で他者受容の姿勢をも合わせもっている様子が窺えた。一方、「孤独感・疎外感」と最も強い負の関連があったのは自己受容であった。自己を受容できていない人の内的世界の奥底に孤独感や疎外感がある様子が窺える。そして、孤独感や疎外感を感じながら生きている人は、他者に対しても閉鎖的・防衛的な姿勢をとり、自尊感情も持てず、自己の存在価値や人生における自分なりの意味や目標も見出せないままに、日々の生活に空虚感を感じつつ生きているのである。孤独感の強い人ほど他者に無関心で、自己を過小評価する傾向があり、社会的規範への適応が悪く、社会的順応性に乏しいことが指摘されているが（工藤・西川,1983)、本研究結果もそれらを支持するものと言えよう。

次に、性差が顕著であった「他者からの受容感」を取り上げ、年齢段階別および男女別による他の尺度との関連を検討した結果からは、青年期・成人前期（大学生、20代･30代）ほど「他者からの受容感」というものが“自己の存在価値意識”と強い関連をもつものであることが示されていた。また、いずれも男性の方が女性よりもその関連は強く、20代･30代群および60代･70代以上群の男性において両者の関連が特に強いことが示されている。さらに、「他者からの受容感」は実存的生き方態度領域（EAL・PIL）や、自尊感情、他者受容に少なからず影響を与えるものであるが、全体的に男性の方が女性よりもこれらの関連が強い傾向にあることが分かる。女性は他者との関係性を重視して生きることが様々な知見から得られているが、しかし、その関係性のあり方というものが男性と女性とでは異なっているのではないかと思われる。人間は誰しも様々な弱さをもって生きる存在である。他者という存在に支えられながら生きるものでもある。自分を理解し、受け入れてくれる人の存在、人の心のあたたかさや支え、人に対する信頼を失った時、人は絶望の淵に佇むことになる。しかし、弱さや欠点をもったありのままのこの自分が他者に受け入れられているという実感、自分にとって重要な他者からかつて受容された経験、他者からのゆるぎない受容感によって自己の内的世界に確固たる自己の存在意義のベースが築かれ、そのことによってその後の人生を自己や他者、世界に対する信頼感と共に、困難にも立ち向かっていく勇気も得られるのではないだろうか。たとえ長い人生において絶望の淵で揺らぐことがあったとしても、自己の内に喚起すべき安らぎの世界を持つ持たないでは大きく異なるものであろう。中高年男性の自殺が多いと言われる日本であるが、他者からの受容感が女性以上に自己の存在価値意識や自尊感情、自己受容、さらに前向きな生き方態度に関連の見られた男性である。今後さらに検討する課題が示唆されているように思われる。

また、「超越力を意識」する姿勢は男女共に加齢に伴って増加する傾向が示されていた。それと相俟って日々の生活における「感謝・安らぎ感」もまた加齢に伴って上昇する傾向が示されていた。人間の全存在を偏狭な既知なる知識やlogosの次元のみで捉えず、soulの次元で捉えようとする姿勢もまた、関係性の中で生きる人間が他者を尊重し、他者とのあたたかな親和的関係を築いていくことが可能になる要因となるのではないかと思われる。本研究で取り上げた領域に関連するものとして内観療法が挙げられよう。自分は親からも誰からも愛されたことがないと感じ、恨みや憎しみを持っていた人が内観によって親（他者）からの愛に気づき涙する事例もある。悔い改めの涙と共に感じる愛は人間的次元を超越するものであろう。そして、自分一人で生きているのではなく、自己の“生（生命・人生・生活等）”を存在せしめているものとして、直接的関係にある他者のみならず、間接的な他者や超越力を意識するところからも「感謝の気持ち」が生まれるものではないかと思う。

序章において述べた上田・河野(1993)の視点は異文化適応に限らず、同じ文化内における異質性にも言えることであろう。画一的側面が多く見られる日本の社会においては、自分の持つ属性と少しでも異なる属性を持つ他者に対して排除の論理が働きやすい。異質なものへの親和的貢献的な関心や、異質なものを自己の内的世界を拡大深化させるものとして積極的に捉えるのではなく、自己の世界や自己が存在する時空間、既知なる世界における安寧や、既存の他者関係における自己の立場を脅かすものとして捉えているようにも思われる。国際化が叫ばれる日本にあっては尚更、身近な生活空間の対他者関係から異質性を受け入れることのできる寛容さ、成熟性が求められ、ありのままの自己に向き合う勇気が必要であるように思われる。その勇気は、能力の有無などの評価的側面による条件付受容といったようなものでは決してなく、弱さも惨めさも合わせ持った人間存在そのものとしての、ありのままの自己を他者（親、養育者、その他の他者）からしっかりと受け入れられたという経験によって生み出されてくるように思われる。他者からの受容感は人に生きる勇気と希望を与えるものでもある。本研究結果を踏まえ、今後さらにそれらの背景にある要因を探っていくと同時に、これらのテーマに関連する社会的次元における課題が山積している昨今、心理学領域が社会から求められているニーズにこたえられるような視点をも含めた研究および活動を行っていきたいと思う。

＜注＞

1）本尺度は日本心理学会第61回大会(1997)にて発表したものを本稿において再検討するものである。尺度名を「存在受容感尺度」と改めた。

2）このモデルは背景変数をもつ検証的因子分析モデル、またはMIMICモデル（Muthen-Muthen,1998）と呼ばれる。

＜引用文献＞

Crumbaugh,J.C.and Maholick,L.T. 1964 An Experimental Study in Existentialism :The Psychometric Approach to Frankl's Concept of Noogenic Neurosis, *Journal of Clinical Psychology*, 20, 200-207.

Erikson,E.H. 1959 Identity and The Life Cycle, International Universities Press,小此木啓吾（訳編）『自我同一性－アイデンティティとライフ・サイクル』誠心書房, 1982.

Fey,W.F. 1955 Acceptance by others and its relationship to acceptance of self and others : A Reevaluation, *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 50, 274-276.

Fromm-Reichman,F. 1959 Loneliness ,Psychiatry, 22, 1-15.

Leary,M.R., Tambor,E.S., Terdal,S.K., & Downs,D.L. 1995 Self- esteem as an interpersonal monitor:The sociometer hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 518-530.

梶田叡一 1966 2者関係に及ぼす自己評価の効果 —他者からの働きかけに対する反応を規定する要因として— 教育・社会心理学研究, 5(2), 137-144.

狩野 裕 1997 『グラフィカル多変量解析—目で見る共分散構造分析—』 現代数学社.

工藤力・西川正之 1983 孤独感に関する研究（Ⅰ）—孤独感尺度の信頼性・妥当性の検討— 実験社会心理学研究,22,99-108.

宮下一博・小林利宣 1981 青年期における「疎外感」の発達と適応との関係 教育心理学研究29(4), 297-305.

宮沢秀次 1988 女子中学生の自己受容性に関する縦断的研究 教育心理学研究,36,258-263.

諸井克英 1987 大学生における孤独感と自己意識 実験社会心理学研究,26(2),151-161.

Muthen, L. K., & Muthen, B.O. 1998 Mplus:User's Guide. Muthen & Muthen : Los Angeles,CA.

長田久雄・原慶子・荻原悦雄・井上勝也 1981 老人の孤独に関する心理学的研究 老年社会学,111-124.

落合良行 1989『青年期における孤独感の構造』風間書房.

岡田 努 1993 現代の大学生における「内省および友人関係のあり方」と「対人恐怖的心性」との関係 発達心理学研究, 4(2), 162-170.

岡堂哲雄監修 PIL研究会編 1993 『生きがい』河出書房新社.

Rogers, C.R. 1958 A Process Conception of Psychotherapy. *American Psychologist*, 13, 142-149.

Rosenberg, M. 1965 Society and the adolescent self-image. Princeton : Princeton University Press.

Sermat,V. 1978 Sources of loneliness, Essence, 2,4, 271-276.

Sheerer, E. T. 1949 An analysis of the relationship between acceptance of and respect for self and acceptance of and respect for others in ten counseling cases. *Journal of Consulting Psychology*, 13, 169-175.

Spivack,S.S. 1956 A study of appraising self-acceptance and self-rejection. *Journal of Genetic Psychology*, 88, 183-202.

高井範子 1999a 実存分析的視点による生き方態度の発達的研究 —実存的生き方態度インベントリー（EAL）による検討— 大阪大学教育学年報, 第4号,101-114.

高井範子 1999b 対人関係性の視点による生き方態度の発達的研究 教育心理学研究, 47, 317-327.

高井範子 2000a 実存分析的視点による生き方態度の発達的研究Ⅱ—PILと自己受容による検討— 大阪大学教育学年報, 第5号, 59-70.

高井範子 2000b 自己受容と生き方態度に関する検討 自己心理学研究, 第1巻, 57-71.

上田吉一・河野憲一 1993 異文化間コミュニケーションと自己実現に関する一考察－ B価値指向態度について－. 人間性心理学研究, 11(1), 68-82.

山本真理子・松井 豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.

山本里花 1989 「自己」の2面性に関する一研究 —青年期から成人期にかけての発達傾向と性差の検討— 教育心理学研究,37,302-311.

和田 実 1989 ソーシャル・サポート（Social Support）に関する一研究 東京学芸大学紀要 第1部門, 教育科学,

40, 23-38.
和田 実 1992 大学新入生の心理的要因に及ぼすソーシャルサポートの影響 教育心理学研究, 40, 386-393.

A Study of the Acceptance by Others and the Attitude toward Life : An investigation by using a Being-Accepted Scale

TAKAI, Noriko

The purposes of this study were: 1) to reconstruct a Being-Accepted Scale, 2) to examine developmental change, 3) to investigate the relationship between the acceptance-by-others and one's attitude toward life. The respondents were 1695 males and females (from 18 to 88 years old). The results were as follows : Four factors were isolated ("acceptance by others", "loneliness / alienation", "awareness of transcendent power" "the feeling of gratitude / peace of mind"). In "acceptance by others", the mean scores were significantly higher for females than for males. But in "loneliness / alienation", the scores of males were significantly higher than those of their female counterparts. In "awareness of transcendent power", the scores for both males and females tended to increase with age. Especially, the scores of females showed remarkable increase between the 20-29 age group and the 30-39 age group($p<.001$). Also, the mean scores were significantly higher for females than for males. Sex differences were found in 30-39,40-49,60-69 age groups. In "the feeling of gratitude / peace of mind", the scores tended to increase with age. The mean scores were significantly higher for females than for males. Furthermore, "acceptance by others" and "the feeling of gratitude / peace of mind" showed a significant, positive correlation with "self-worth" and "self-acceptance", and led to a vigorous attitude toward life and acceptance of others.